

## 毎日出版文化賞：受賞、力作5点

2009.11.03 東京朝刊 11頁 特集面 写図有 (全4,061字)

第63回毎日出版文化賞（特別協力＝大日本印刷株式会社）の受賞作5点が決まりました。本賞は第二次世界大戦の終結後間もない1947年、出版文化の向上を願い創設されました。出版点数が拡大する中で、毎年、優れた出版物を選び顕彰しています。

選考は、文学・芸術▽人文・社会▽自然科学▽企画（全集、講座、辞典、事典など）の4部門で行いました。特別賞は、部門を問わず、「広く読者に支持され、出版文化の向上に貢献した出版物」に贈られます。対象は、今年8月までの約1年間に初版が刊行された出版物、同時期に最終巻が刊行された全集などです。出版社からの自薦と毎日新聞社が委嘱した方々の推薦によって計255編が集まり、予備選考を経て計25編が最終選考に残りました。（敬称略）

### ■文学・芸術部門

◆『1Q84（BOOK1・2）』＝村上春樹・著（新潮社）

◇交響楽のような壮大さ

村上春樹氏の「1Q84」ほど今年話題になった本はあるまい。

その売れた数は社会現象のように言われ、本の内容も大きな論議をよんだ。選考会席上においても、この小説は実は未完成ではないか、寓話（ぐうわ）性が強過ぎる、という声があがったが、しかしそれらの欠点があったとしても、「1Q84」は素晴らしい魅力にみちている。

村上氏ならではの、簡潔でいて美しいリズムをつくり出す文体、これ以外のものがあるとは思われない完璧（かんぺき）な比喩（ひゆ）。最初はサスペンスの様相を見せながら、小説は恋愛小説の旋律を帯び、やがて交響楽のように、壮大なテーマに向かって進んでいく。実はここに存在しているものはまやかに過ぎないのではないだろうかという不安に、小説自体も揺れ始めるその巧みさ。宗教というものも、そのまやかしを確認するためのひとつの儀式のようなものだ。本当の世界とこちらの世界を繋（つな）ごうとする主人公の努力は、やがて空（むな）しく終わるが、その余韻さえも作者は計算している。

村上文学は、ここでひとつの完成をみたと思はる。（林真理子）

## ■人文・社会部門

◆『政治の美学——権力と表象』＝田中純・著（東京大学出版会）

◇果敢で周到な「知の冒険」

田中純「政治の美学——権力と表象」（東京大学出版会）は、政治がまとう美的表象、美に内在する政治権力という刺激的主題をめぐって書かれた、巨大にして緻密（ちみつ）、果敢にして周到な労作である。映画作家ジーバーベルク、ロック歌手ボウイ、美術史家ヴィンケルマン、神話学者デュメジル、建築家堀口捨己（すてみ）など、扱われている対象は多岐にわたり、その膨大な作品と言説が織りなす思考の迷路を、田中氏の明快かつ重厚な論述が一気に踏破してゆくさまには、巻を措（お）くあたわざるスリルが漲（みなぎ）っている。

巻末の「跋（ぼつ）」に、思想史家橋川文三から借りて「野戦攻城」という美しい言葉が引かれている。よるべない広野に身を置き、退路を断って次々に新たな城を攻略しつづける田中氏の重戦車のような思考は、美術史から政治思想史へ、哲学から建築美学へ越境してゆく真に「領域横断的」な学問の実践である。日本のみならず世界においても地盤沈下が嘆かれる人文科学が今もっとも必要としている「知の冒険」の、豊饒（ほうじょう）このうえもない一成果がここにある。（松浦寿輝）

## ■自然科学部門

◆『つながる脳』＝藤井直敬・著（N T T出版）

◇普遍的独自性に満ちた研究

本書には優れた点が複数ある。

第一に現役の研究者が、自分の仕事をその前提から、平易な語りかけの文章で、きちんと解き明かす。前提の提示は学問では当然だが、じつは慣習に従うだけという科学研究がいかに多いか。

第二に、ふつうよい研究者は研究室での仕事にかまけて、一般向けの本を書かない。しかし著者は自分の社会的責務をきちんと果たしている。

第三に、研究の内容が優れている。欧米では普通ではない、日本というよりアジア的、仏教的前提に立つ。これがいわば普遍的独自性を生む。

「つながる脳」という表題自体が脳が社会的存在であることを意味している。これは個を社会の基本と考える欧米的な発想からは出にくい。つながってしまったら、個性はどうなる。そう思うからである。さらに「脳は二度と同じ状態をとらない」ことを著者は研究の前提の一つとする。物理や化学の実験で、再現性がないといえば物議をかもすであろう。以上、出版文化賞授賞の対象としてきわめて適切と考える。（養老孟司）

## ■企画部門

◆『江戸時代語辞典』＝頼原退蔵・著、尾形侑・編（角川学芸出版）

### ◇近世文学研究の基礎

「俳諧史の研究」や「江戸時代語の研究」といった実証的な研究業績を残した頼原退蔵（京大教授）は、いまから六十年まえ、昭和二十三年に亡くなった。頼原はその死に先立って、本書「江戸時代語辞典」の編纂（へんさん）をくわだて、戦時下の昭和十七年には語彙（ごい）カード十万枚を作成していた。

こういった頼原の計画は、近世文学の研究・解釈のためにはまずその当時の言語・風俗・慣習などの用語や用例を採集することから始めなければならない、という考えに立っていた。その考えを引き継いだ野間光辰（こうしん）（京大教授）が、頼原の語彙カードと原稿を保管・整理し、これを本書の編者である尾形侑（成城大教授）に引き渡した。項目数は約二万五千六百余、原稿枚数はおよそ二万六千四百枚にのぼる。尾形はそれを、平成二年の自らの古稀（こき）の記念論文集のかわりに、教え子たちの協力をえて校正、整理、補完したのである。この画期的な辞典の完成をよろこぶとともに、多年の努力がこれからの近世文学、近世社会の研究に役立つことを願ってやまない。（松本健一）

## ■特別賞

◆『運命の人 全4巻』＝山崎豊子・著（文芸春秋）

### ◇詳しい調査、高い表現の質

特別賞は、単独の著作そのもの、あるいはその企画が出版活動全体に大きな意義があり、強い刺激を及ぼしたと考えられるものに与えられる。

今年は、極めてすんなりと山崎豊子の「運命の人」四巻に決まった。大きな意義と刺激ということから考えると、著作の性格によっては、たくさんの人に読まれて

いるという要素も重要になる。

この点、「運命の人」はたまたまアメリカでの公文書開示によって、沖縄返還を巡る密約の存在の問題が人々の関心を集めたこともあり、大きな発行部数に達していた。

しかし、それにもまして、詳しい調査、取材に基づく内容表現の質の高さが各委員から評価された。

折柄（おりから）、同じ著者による「沈まぬ太陽」が大作映画になりつつあった事なども、現実社会の矛盾に積極的に挑む山崎豊子の姿勢を証明していた。

選考会では、ドレフェース事件に際しての、フランスの文学者たちの積極的な姿勢を指摘した推薦の意見もあった。（辻井喬）

.....  
.....

◇選考委員

▽白石太一郎氏 国立歴史民俗博物館名誉教授（考古学）

▽辻井喬氏 作家、詩人

▽橋爪大三郎氏 東京工業大教授（社会学）

▽林真理子氏 作家

▽松浦寿輝氏 作家、詩人

▽松本健一氏 評論家、麗澤大教授（近代日本精神史）

▽御厨貴氏 東大教授（日本政治史）

▽村上陽一郎氏 東京理科大嘱託教授（科学史）

▽養老孟司氏 解剖学者

▽米本昌平氏 東大先端科学技術研究センター特任教授（科学史・科学論）

▽菊池哲郎 毎日新聞社主筆



《本賞》著者・訳者等に賞状と賞金100万円、賞品にパーカー ソネット プレミアム チョコレート万年筆。出版社に賞状とブロンズ。

《特別賞》著者・編者等に賞状と記念品、賞品にパーカー プレミアム チョコレート万年筆。出版社に賞状とブロンズ。

このほか、本賞、特別賞の著者・訳者等には、大日本印刷株式会社から「DNP賞」として賞状と金の懐中時計が贈られます。

.....  
.....

■人物略歴

◇むらかみ・はるき

作家。1949年生まれ。早大第一文学部卒。79年「風の歌を聴け」でデビュー。主な長編に「羊をめぐる冒険」「ねじまき鳥クロニクル」「海辺のカフカ」など。作品は世界の45の言語に翻訳されている。

.....  
.....

■人物略歴

◇たなか・じゅん

東大准教授（思想史・視覚文化論）。1960年生まれ。91年、東大大学院修士課程修了。「アビ・ヴァールブルク」（01年）でサントリー学芸賞、「都市の詩学」（07年）で芸術選奨文科大臣新人賞を受賞。

.....  
.....

■人物略歴

◇ふじい・なおたか

理化学研究所脳科学総合研究センターの適応知性研究チームリーダー。1965年生まれ。東北大で博士号を取得、米マサチューセッツ工科大の上級研究員を経

て、04年に帰国。著書に「予想脳」など。

.....  
.....

■人物略歴

◇えぼら・たいぞう

1894～1948。京都帝大文学部卒、母校で教べんを執った。著書に「俳諧史の研究」など。

.....  
.....

■人物略歴

◇おがた・つとむ

1920～2009。東京文理科大在学中から、頼原退蔵に師事。成城大教授などを歴任。「蕪村自筆句帳」（74年）で読売文学賞を受賞した。頼原の娘婿。

.....  
.....

■人物略歴

◇やまさき・とよこ

作家。1924年生まれ。京都女子大卒。毎日新聞記者を経て「花のれん」（58年）で直木賞。91年に菊池寛賞を受賞した。著書に「白い巨塔」「不毛地帯」「二つの祖国」「大地の子」「沈まぬ太陽」など。

毎日新聞社